

優しいハンカチ、煌く鍵

(原文)

藤井 陽紗 (13 歳)

兵庫県

須磨学園中学校

「痛い」最初私は、何が起きたのかわからなかった。しかし、すぐに右足にとてつもない痛みが広がり、私は慌てて足元に目を向けた。そこには、血を流している右足首があった。右足が自転車のチェーンに絡まってしまい、私は自転車ごと倒れてしまったのだ。私の叫び声を聞き、前を走っていた父が血相を変えて戻ってきた。そして通行人の方や近くのお店の方たちも、倒れて泣いている私の周りにすぐに集まってきてくれた。ある女の方は「これをにぎっておきなさい」とハンカチをさしだしてくれた。また別の男の方は、救急車を呼んでくれた。他にもたくさんの人たちが私を心配し、口々に励ましてくれた。私は強い足の痛みと不安でいっぱいだったにも関わらず、その方たちの優しさに胸が温かくなるのを感じたのを覚えている。救急車がきて病院に運ばれていく途中も、私は女の方が渡してくれたハンカチをずっと握りしめていた。そのハンカチをぎゅっと握っているとなぜかとても安心できたからだ。しかし、そのあと病院で怪我の緊急治療を受ける中で、私はその大事なハンカチを失くしてしまった。どこかに置いてきてしまったのか落としてしまったのか、治療を終えて帰宅したときにはハンカチはどこにも見当たらなかった。私はそのことが今でも一番心残りだ。その女の方の名前も連絡先も聞いておらず、今では顔すらあまり思い出すことができない。しかし、一度でいいから私は彼女にお礼を言いたい。あの時優しい言葉をかけてくれたり、肩をさすってくれたりした人たちにもたくさん感謝を伝えたい。

「思いやり」これは、とても短くいつでもどこでも簡単に口にできる言葉だ。しかし、この短い言葉にはとてもたくさんの意味が込められていると私は考える。強烈な痛みが右足を襲ったあの時、私に優しく手を差し伸べてくれた方たちへの感謝を私は決して忘れない。私は、あの方たちのおかげでどれだけ元気をもらい、心が助けられたか。あの方たちにとっては、ちょっとした出来事であって、もしかしたらもう忘れてしまっているかもしれない。しかし一人ひとりの「些細な思いやり」が、私の不安な心を元気づけ、救ってくれたのだ。

「価値観」という言葉を辞書で引くと一番初めに「物事の価値についての、個人の考え方」と出てくる。この世界では、価値観の違いによる国や民族間での紛争から、家族や友人のような近しい関係の中での喧嘩まで、ありとあらゆる争いが毎日のように起こっている。異なる価値観を持つ他人を、無理やり自分の価値観にあわせようとすることは、争いを生み出す。私は自分の価値観を大事にしながらも、

相手の考え方や価値観の在り方を尊重し、理解しあえるよう価値観を共有したいと思う。

13歳の今の私は、「価値観とは」と人に問いかけられたとしても、すぐに正確な答えを出すことは、まだできない。私がこれから生きていく上で様々な価値観を持つ人々と関わり、多くのことを見聞きし、たくさんの経験を積んでいってこそ得られる答えなのだと思う。私の日々の暮らしの中で、学校に通い先生の授業を受けているとき、友人と語りあっているとき、課題に取り組んでいるとき、家族と過ごしているとき、書物を読み音楽や絵画に感動しているとき、ダンスをしているとき、その全ての時間と経験がその答えに通じる多くの扉を開けるために散りばめられた鍵の数々なのだ。そのように思うと、一日一日がとても貴重であり、一日を終えて眠るときには、明日もまた頑張ろうと思う。

「思いやりとは」「価値観とは」その答えを見つけた未来の私は、どのような大人になっているのだろうか。あの日私の不安を和らげてくれたハンカチのように、人の不安を和らげ、困っている人や苦しんでいる人を助けることのできる人間になれるよう、煌く鍵を見つけて磨いていきたい。